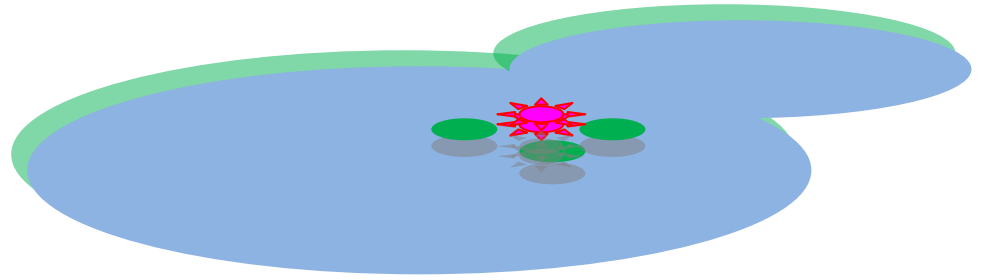


しゅう せん か にっ き  
周 旋 家 日 記  
乾 明 紀



私が、このマガジンを発行する対人援助学会に関係したのは、準備会からだったと思う。当時私は、京都造形芸術大学のプロジェクトセンターの教員で副センター長の目的であった。社会が抱える様々な課題を「アート」と「学生」の力で解決しようというのが、京都造形芸術大学のプロジェクトセンターであった。社会とは、地域であったり、行政であったり、企業であったり、病院であったり、寺院であったりと様々であり、そこが抱える課題も「まちづくり」から「業績向上」まで様々であった。しかし、共通して言えることは、アートと学生の力で、世の中が必要とする「価値」を生み出していくことであった。

私の仕事は、地域から寺院までに至る様々な社会と学生をつなげ、価値を生み出していくことであった。ある集団や組織は、長年の活動の中で、良く

も悪くも「文化」や「ルール」に支配されていく。その文化やルールが世の中との関係において、価値を生み出せなくなったとき、その集団や組織は存続の危機に陥る。その存続の危機に光明を灯すべく、社会と学生をつなげ、新たな発想や仕組み、製品などによって、世の中との新たな関係性を創り出すのが、教員としての私の仕事であった（当然、これ以外にも、学生に「つなげる」や「アートを世の中に活かす」方法を学びとらせるなどの教育者の仕事もあるし、それがどのようなロジックで起きるのかを理論化するという研究者としての仕事もあった）。

「つなげる」という仕事は、孤高の芸術家が自らの思想と手によって作品を創り出す行為とは異なり、他者との関係の中で価値を紡いでいく行為である。いつの頃からか、私は「つなげる」という行為が仕事の中心になっ

ていった。芸術大学の教員へのお誘いがあったのも「つなげる」行為を実践していたからだ。さらに、私自身も「つなげる」仕事を通じて、世の中と心地よく「つな“が”る」ことができている。このマガジンでは、「つなげる」行為について徒然に綴っていきたいと思っている。

さて、この「つなげる」を仕事にしていると「コーディネーター (coordinator)」と呼ばれることがある。手元にある英語の辞書で引いてみると、『同等 [対等] にするもの [人]、調整するもの [人]、(企画推進などの) 責任者、まとめ役』などの意味があった。ちなみに、平成 14 年におこなわれた文化庁の調査では、認知度が 24 位の外来語である (同調査では、23 位がコスト、25 位がコーディネート、26 位がリスク。なお、1 位はストレス、2 位はボランティア)。9 割近い日本人が知り、6 割近い日本人が正しく意味を理解しているこのカタカナ語は、日本語になりつつあると言えるが、そんな外来語である「コーディネーター」と呼ばれることが多い私だが、今年の秋ごろから、友人とカタカナ語を卒業し、「周旋家」を名乗るようになった。よって、このマガジンでは、「周旋家日記」と称し、私の周旋活動について語ろうと思っている。

「周旋」とは、手元の『広辞苑』によると『①たちめぐること。ぐるぐるめぐること。②事をなすために立ちま

わること。世話をすること。取持ち。斡旋。③ (good offices) 国際法上、第三国が外部から紛争当事国の交渉を援助すること』の 3 つの意味がある。私と友人は、『事をなすために立ちまわること。世話をすること。取持ち。斡旋』のスペシャリストでありたいとの思いから「周旋家」と名乗るようになった。

ちなみに、日本の歴史上において、「周旋家」として期待され、それに最も応えた人物をご存じだろうか。それは、伊藤博文である。吉田松陰から「才劣り学幼き、素直にして華なし」と酷評されることもあった伊藤博文だが、「利介亦進む。中々周旋家になりそうな」との期待どおり、幕末は四面楚歌の長州藩で、明治維新後は内憂外患の新政府において、周旋力を大いに発揮した。私が友人と「周旋家」を名乗ったのは、二流と言われながらも難局を乗り越え、事をなした伊藤公にあやからうとしたからである。

さて、「周旋家日記」というタイトルの理由を述べるのにここまでかかったが、周旋に関する出来事をひとつは書いておこう。今回は最初の日記なので、私個人が周旋という行為が好きになるきっかけをどうしても書いておきたくなった。

私は、高校 2 年生になってアルバイ

トを始めた。野球部を怪我で辞め、比較的時間があつたので、友達に誘われ、こっそりと始めた。最初はファミリーレストランだったのだが、長期休暇に入り、近所の洋食屋さんでアルバイトをすることになった。カウンターがある割烹のような造りの小さなお店だったが、ハンバーグやオムライスがおいしく、昼時は繁盛していた。私の仕事は、(慣れてからであるが、)フライを揚げ、ランチを盛り付けつつ、大将のオムライスを巻き終わるタイミングで皿を渡しつつ、キャベツや玉ねぎをお客さんの様子を見ながら刻みつつ、注文を聞き、お勘定をいただき、ときに出前を運ぶことであつた。

ファミリーレストランのマニュアル中心の環境では萎縮しがちな私であつたが、洋食屋さんの環境はとてもあつた。忙しくなったら時給を少し上げてくれるのも嬉しかったが、それよりお客さんと大将の反応が嬉しかった。キャベツや玉ねぎを刻みながらお客さんの様子を伺い、「注文か」、「お勘定か」、「おかわりか」、「世間話か」を状況を見ながら判断し、速やかに反応することが楽しかった。2つ以上のことを同時にできている自分もかっこいいと感じていたし、何よりお客さんのニーズにすぐ答えることで、常連さんや大将から可愛がられた。何かをしながらカウンター越しにお客さんの様子を伺っている瞬間は、自己効力感が湧いてくるような心地よさがあつた。結局、このアルバイトを私は大学

を卒業するまでの6年間続け、卒業の際には弟に引き継いで終えた。

このとき身に付いた他者への想像力や状況判断力、複数の仕事を同時にこなす対応力や速やかに反応するという瞬発力は、人を「つなげる」という周旋に大いに役立っている。これらの力は、すべて洋食屋さんのお客さんや大将の反応によって高められた。これには本当に感謝している。常連さんの中には就職しないかと声をかけてくれる人もいた。才劣り学幼き私が、こうして周旋家になれたのは、当時の温かい反応のお陰である。このマガジンで連載を始めるにあたって、どうしても書いておきたかつた。次回からは、就職後の様々な「周旋」について書いていくこととしたい。